「活用力」を育てる授業の考え方と実践

著者：安彦忠彦
出版社：図書文化社
価格：1,680円



第一章で著者の考えに一番共鳴したのが、「知恵」についてである。「『知恵』というものは、必ずしも正解があるかどうかわからない問題についての解決策であり、『知恵』はいろいろな制約条件を乗り越えてゆく過程で育つ」と著者は述べている。私も児童生徒の「活用型」学力の低下が、社会で喧伝される度に、まずは知識を覚えさせて、その結果をテストで答えさせる従来型の「正解主義」教育が問題であると思う。

また、著者は「知恵は庇護されすぎて何の抑制や抵抗もない環境では育ちにくいのではないか」という。残念ながら、物質的に恵まれたわが国の学校では、生徒たちが抑制や抵抗にしばしば直面するということは少ないだろう。そうだとすると、著者が言うように実際の学校生活の中に、抑制や抵抗を意識的に持ち込む必要もあるだろう。それは著者がとり組んでいる実社会との接点づくりや、実社会での会社経営を擬したシミュレーションの教材や授業に他ならない。それらは大阪商業大学がいくつかの学校で実施しているプログラムやビジネスアイディア甲子園、起業教育ワークブックの活動と理念の上で重なる。この本を読んで、「どうして総合的な学習が必要なのか」という疑問が解消されるだろう。同時に、結局のところ、すべての教育の目的は「知識をただ得ることではなくて、知識をどう実際に使うのか」を教えることに尽きると思えてくる。

「なぜ総合的な学習は必要なのか？」そして、「どのようにすれば総合的な学習は活性化するのか」、そういう気持でこの本を読み進んだ。その回答は、「総合的な学習など経験・体験型学習は体験現場にいて生

徒の行動を見守っているだけで新たな個性を発見できる機会に出会える。そして、その発見を日常の指導に生かせる。つまり、手段として体験学習がある」ということであった。実際、体験学習を進めると、教師は「あの子にあんなことができるとは思わなかった」という発見に遭遇するものであるので、著者のこの指摘は首肯しうるものである。

著者は最後に「教員が生徒の新たな個性を発見したときの純粋な感動は、それ自体がすでにきちんとした評価になっているうえ、その個性を伸ばしてやりたいという教員らしい強い思いはそれ自体が責任ある使命感になっている。体験的な活動を通して、このような高い理念と健全な動機を持つ多くの学校教員を見てきたので、学校と教員は日本の立国基盤の確立という点においてきわめて重要な存在であり、その人たちが果たす成果の大きいことを疑わない」と感動的な言葉を述べている。この本は、教員に向かって語りかける口調で書かれており、とても分かりやすい。そして実生活と接点を持った「起業教育」のような体験型学習の重要性も再認識できる。体験的活動に理解を深めてもらうためにも、教員以外のいろいろな世代の方に幅広く読んでほしい。

大阪府教育センター　岡本利昭